SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

雪子はいつ結婚するのか：谷崎潤一郎『細雪』と映画・演劇

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, ともえ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029536

雪子はいつ結婚するのか―谷崎潤一郎『細雪』と映画・演劇

中村　ともえ

1　昭和十六年春、雪子の結婚という結末

『細雪』の結末

谷崎潤一郎の小説『細雪』は、大阪・船場の旧家、蒔岡家の四姉妹の物語である。父母は既に亡く、長女・鶴子は婿養子である辰雄の転勤にともない、上巻で「故郷の土地を引き払」（上・二十二）って東京に移住する。次女・幸子は、夫の貞之助、娘の悦子、女中のお春らとともに芦屋で幸福に暮らしている。未婚の三女・雪子と四女・妙子は、本家よりも幸子の家を好み、理由をつけては滞留していた。その二人の妹が、雪子は複数人との見合い、妙子は複数人との恋愛を経てそれぞれ結婚を決め、幸子の家を出ていくというのが、上・中・下巻からなる長大なこの小説の結末である。

雪子は、上巻の開始時点で「いつの間にか婚期を逸してもう三十歳にもなっている」（上・二）と説明されていた。そこからさらに五年の歳月を加えて、かつては「いつもこちらが「不許可」を祢（とな）えて先方を「落第」させてばかりいた」（下・七）のが、下巻では相手から「「落第」を宣告され（略）こちらが「敗者」の烙印を捺される側に立たされ」るようになっていたが、ついに御牧という人物との結婚が決まる。

御牧は、「維新の際に功労のあった公卿華族」（下・二十七）である御牧という子爵の「庶子」で「建築屋」、つまり建築家である。美容師の井谷によって化学工業会社のサラリーマンである瀬越との見合い話が幸子のもとに持ち込まれるところからはじまったこの長篇小説は、最終章では、挙式・披露宴・新居・新婚旅行・嫁入道具など結婚にまつわる諸々の準備を進める幸子らの日々を語る。途中、兵庫県庁勤務の野村、素封家の沢崎、製薬会社重役の橋寺らが雪子の見合い相手として登場し退場していく。御牧との結婚は、こうした実現しなかった複数の可能性の後に成立している。

昭和十六年春の雪子の結婚

『細雪』という長篇小説は、雪子が建築家と結ばれるという結びになっている。このように雪子の結婚をもって終わることは、はじまりの時点から予定されていたようである。上巻序盤で雑誌連載が中止された際、次回発表予定だった原稿の末尾に作者は以下のように記していた。

> 作者云ふ、――此の小説は日支事変の起る前年、即ち昭和十一年の秋に始まり、大東亜戦争勃発の年、即ち昭和十六年の春、雪子の結婚を以て終る。[1]

作者は後に、時勢の影響で「「不倫」や「不道徳」な面」を「最初の構想のまゝにすゝめ

[1] 谷崎潤一郎「細雪上巻原稿第十九章後書」。発表はされず、没後に全集に収録された。

ることはさすがに憚られた」と振り返ってもいるが[2]、結末に関しては当初の構想から動かなかったようである。後書では、他の出来事には触れず、昭和十六年春の雪子の結婚という結末だけが確言されている。

作者は二つの戦争によって作中世界の範囲を説明している。その作者の言の通り、『細雪』の作中の年代は、昭和十一年（一九三六）の秋から日支事変を経て、大東亜戦争開戦の年である昭和十六年（一九四一）の春までの約五年間である。井谷が幸子のもとにこの話を持ち込むのは下巻の二十七章で、見合いが行われるのは十五年の秋である。小説はここから最終章の三十七章までで、幸子がもう一人の妹、妙子の妊娠・出産・結婚の対応に追われながらも雪子の結婚にたどり着く半年間を駆け足で叙述する。雪子の結婚という結末に至るこの最後の十章程度を、本稿では結末部と呼ぶことにする。

なお、本稿では、日支事変を日中戦争、大東亜戦争を太平洋戦争と、現在の通称で適宜言い換える。また、作中で登場人物が元号と西暦を用いているため、年代は適宜併記して示す。

作中年代と発表時期の時差（タイムラグ）

『細雪』の作中年代は、昭和十一年（一九三六）秋から十六年（一九四一）春である。一方、連載開始は昭和十八年（一九四三）で、完結は二十三年（一九四八）である。作者は太平洋戦争開戦以前の世界を、太平洋戦争開戦後に執筆しはじめて、終戦後に完結させている。

このうち上巻と中巻は、太平洋戦争開戦後の戦時下に執筆されている。上巻は、序盤は雑誌連載され（「中央公論」一九四三・一、三）、戦時下に相応しくないとして連載中断後、私家版として上梓された（一九四四・七）。中巻も私家版が準備されていたが実現しなかった。後に公表された日記の昭和十九年（一九四四）十二月二十二日の項に、「「細雪」中巻完結するを得たり」の記載がある[3]。下巻は、どこまで終戦前に書かれていたか、敗戦がどのように物語に影響しているかについては議論があるが[4]、雑誌連載と単行本の刊行は戦後である（「婦人公論」一九四七・三～一九四八・一〇、一九四八・一二、中央公論社）。上巻と中巻も、戦後に改訂されて公刊された（上巻は一九四六・六、中巻は一九四七・二、いずれも中央公論社）。上・中・下巻を一冊にまとめた『細雪（全）』が中央公論社から刊行されたのは、昭和二十四年（一九四九）十二月である。つまり『細雪』の全巻が刊行され、上・中・下巻を通して読むことが可能になったのは、戦後ということになる。

『細雪』は、完結した作品としては、戦後の作品である。むろん完結が戦後になることは、連載開始の時点では予想できなかったことである。小説が雪子の結婚という結末を太平洋戦争開戦前の昭和十六年春に迎えることはあらかじめ決まっていたが、その予定通りの結末は、結果的に戦後に執筆・発表されることになった。作中年代と作品が発表され読まれた

---

[2] 谷崎潤一郎「「細雪」回顧」（「作品」四八・一一）。同様のことは他でも述べている。

[3] 谷崎潤一郎「疎開日記」（『月と狂言師』四九・七、梅田書房）。

[4] 作者は「下巻は殆ど大部分を終戦になつてから書上げた」（「「細雪」瑣談」「週刊朝日」四九・四・一〇）と述べているが、書簡や日記をもとに執筆の進度を推定し、下巻の最初の雪子の沢崎との見合いの挿話の中に「敗戦の亀裂」を読み込む議論もある（渡部直己「雪子と八月十五日」『谷崎潤一郎――擬態の誘惑』九二・六、新潮社）。

時期の時差（タイムラグ）は、下巻、殊にその結末部において決定的にひろがっていたはずである。それは何年の差かという数の問題ではなく、時代状況としての時差である。

ところで、昭和十六年春の雪子の結婚という結末が予定通りだったとして、その相手が建築家であることはどうだろうか。『細雪』の姉妹たちは作者の親族をモデルにしており、御牧にもその設定を借りた人がいるという事実はある[5]。だが執筆の背景ではなく、発表され読まれた作品として、作中年代と発表時期の時差は結末にどのように作用しただろうか。

2　『細雪』はいつの作品か

『細雪』の脚色

ここで少し視点を変えて、『細雪』を原作とする映画や演劇において作中年代がいつに設定されているのか、参照したい。本稿では以下、小説の結末――昭和十六年春に雪子が御牧と結婚するという結末――を読み解くための準備として、映画と演劇において作中世界がいつの時代のものとして語られているのか、複数の脚色を参照し検証する。なお、映画と演劇は、小説の完結後に制作されているため、すべて戦後の作品である。

『細雪』の映画化は、阿部豊監督・八住利雄脚本の「細雪」（一九五〇・五、新東宝）、島耕二監督・八住利雄脚本の「細雪」（一九五九・一、大映）、市川崑監督・市川と日高真也脚本の「細雪」（一九八三・五、東宝）の三度、行われている。以下、監督の名前を借りて、それぞれ阿部豊版、島耕二版、市川崑版と呼ぶこととする[6]。

演劇化は、脚色者で区別すると、郷田悳版（一九五〇・七、新橋演舞場）、菊田一夫版（一九六六・一、芸術座）、川口松太郎版（一九六八・一、新橋演舞場）の三種類を確認できる[7]。また、菊田一夫脚色・堀越真潤色とされるヴァージョンがあるが（一九八四・二、東京宝塚劇場）、台本を照合すると重ならない箇所が多いため、堀越真版と呼ぶこととする[8]。こ

---

[5] 谷崎は随筆「三つの場合」（「中央公論」六〇・九～六一・二）で、雪子のモデルが義妹の重子で、御牧のモデルが重子が昭和十六年春の天長節に結婚した「華族の次男坊」の渡辺明であることを明かしている。井谷による御牧の説明は、先祖のことや「「建築家」とあるのを木工家と置き換へれば、そつくり明さんのことになる」という。「三つの場合」は、明の木工家具展の記事が岸田日出刀らの推薦文付きで建築雑誌に掲載されたことなどにも触れており、こうした事実にもとづき建築家という設定にしたのだろうと想像される。なお、御牧は尼崎の飛行機製作所に勤める予定だが、事変下で木工の工場を閉鎖していた明は、谷崎のつてで埼玉県与野の工業会社に勤めたが続かなかったという。明はアメリカの自動車学校や大学で工学を修めたらしい。

[6] 阿部版と島版はどちらも八住利雄が脚本を担当しており、共通点も見られる。森年恵は島版を阿部版の「リメイク」と位置付けている（「「美しい四姉妹」の生成と変容――『細雪』におけるリメイク／翻案の過程」「映画研究」二〇二〇・一二）。

[7] 同じ脚色者の脚本で複数回上演されている例もあるが、いずれも初演のデータを示した。

[8] たとえば「悲劇喜劇」の「帝劇開場百周年」特集号の堀越版の台本（付記参照）は、帝劇百年記念公演（二〇一一・一〇、帝国劇場）にあわせて掲載されたようだが、「昭和四十

のうち堀越版が定番化して、現在まで上演回数を重ねている。なお、映画と演劇の他にテレビドラマも複数制作されているが、本稿では取り上げない。

映画と時代

最初の映画化である阿部豊版は、冒頭で「昭和十二年」という年代を明示している[9]。ただし、映画はその時代を表現しようとつとめてはいない。家柄や格式にこだわる本家に反抗し、もがきながらも新しい女性として生きる妙子にフォーカスする阿部版は、むしろ一九五〇年の作品にふさわしく、戦後的な価値観に立脚している。高峰秀子演じる妙子は、洋装で、煙草を吸い、酒を飲み、自活を目指し、板倉と屋外でデートを重ね、自由な恋愛をしようとする。妙子が雪子に「女には平凡な家庭生活の他には生きる道も倖せもないもんやろか」と疑問をぶつける場面もある。

映画は、先代夫妻の肖像画の掛かった本家のシーンからはじまる。終盤、雪子の結婚が決まり、東京に引っ越した鶴子が墓参りの後に本家に立ち寄る場面で、鶴子と幸子はこの家の薄暗さを改めて意識する。このとき二人は、「茶碗の中に落ちた白蟻がぶる ＜ と羽をもがかせている」のに気づく。小説にはない茶椀の中に浮く数匹の白蟻という強烈なイメージによって、古い家が内側から蝕まれていたことが、すなわち家というものを支えていた古い価値観の崩壊が暗示されている。本家の批判者であった妙子が雪子の嫁入道具が飾られた幸子の家を出て、姉たちに見送られながら一人長い道を歩いていく引きのショットで映画は終わる。

続く島耕二版は、時代を戦後に移している[10]。細かいことだが、妙子の人形製作の弟子は、小説では白系ロシア人のカタリナで、島版ではアメリカ人のメリーである。映画・演劇は総じて外国人との交流の挿話を省いており、単純には比較できないが、島版におけるアメリカ人への変更は、戦後という時代ゆえだろう。この場合、戦後とは、映画の作中年代であり、かつ映画が制作・公開された時代のことである。

妙子を主人公格にして古い家と新しい価値観の対立を描く阿部豊版も、作中年代を戦後に移してアメリカ人の人物を登場させる島耕二版も、戦後に制作されたからというだけでなく、戦後の作品だと言うべきである。一方、「昭和十三年のことである」という文章を画面上に表示してはじまる市川崑版は、その時代を「戦争の足音が／日本中を覆いはじめた頃」[11]と捉え、後述のように随所で戦争の話題に触れている。作中年代がいつに設定されている

一年初演、上演回数一三六四回」と、菊田版の初演から上演回数を数えている。本稿では菊田版と堀越版を別の脚色として区別する。

[9] シナリオでは「昭和十×年」。

[10] 時代が変わったことで、たとえば中巻のクライマックス、妙子が板倉に救出される水害は昭和十三年（一九三八）七月の阪神の水害ではなくなる。シナリオでは、妙子は愚連隊にからまれたところを板倉に助けられたことになっている。

[11] パンフレットの惹句より。全文は、「戦争の足音が／日本中を覆いはじめた頃／大阪船場の／名家　蒔岡一族は／華麗な歴史を／閉じようとしていた。／斜陽に映える／満開の桜のように／限りない優雅さで／時代の幕を引いたのは／その美しい／四姉妹であった

かだけでなく、各作品がその時代をどのように表現しているかも検討する必要がある。

雪子の結婚はいつのことか

加えて、ほとんどの脚色が小説の作中世界に流れる五年間という時間を短縮している点にも注意する必要がある。舞台を戦後に移す島耕二版を除き、作中年代がはやいほうから並べると、川口松太郎版が昭和十一年の秋から十二年春[12]、郷田悳版が昭和十三年の春から秋のそれぞれ一年未満、市川崑版が昭和十三年の春から冬の一年間である[13]。菊田一夫版は昭和十一年秋から十六年春と、作中に流れる時間を小説と揃えているが、これを改修した堀越真版は昭和十二年春から十四年春の二年間に短縮している。昭和十二年という年を明示してはじまる阿部豊版も、桜が二回映ることから、堀越版と同様の範囲だと推定できる。

これは大部の長篇小説を一定の上映・上演時間におさめるための措置なのだろう。脚色はいずれも小説の中のエピソードを取捨選択し、適宜順番を入れ替えるなどして物語を整理している。だが注目したいのは、このような時間の短縮に当たって、脚色の多くが小説の作中年代のうち、後ろのほうを落とすことを選択している点である。具体的には、下巻は昭和十四年（一九三九）六月にはじまるが[14]、ここから結末の昭和十六年春までの約二年間の時間は、ほとんどの映画・演劇には含まれない。一方で、映画・演劇は雪子の結婚という小説の結末を、概ねそれぞれの作品の結末としている[15]。その結果、小説では昭和十六年春のことである雪子の結婚が、映画・演劇ではそれよりはやい年に起きることになる。

雪子の結婚自体はプライベートな出来事で、それが昭和十六年であろうとたとえば十三年頃であろうと、あるいは戦後に移したところで、変わらないようにも思われる。姉妹たちの物語としては、そうかもしれない。しかし、雪子の結婚相手である御牧に関しては、太平洋戦争前のこの年代であることが、作中年代と発表時期の時差を含めて意味を持つと考えられる。どういうことか。以下、堀越真版と市川崑版を中心に、映画・演劇において時代がどのように表現されているのか、戦争の語られ方を手がかりにして検証する。

3　男たちの戦争、女たちと戦争――映画・演劇の場合

「戦争ごっこ」

全三幕からなる堀越真版は、冒頭の場面に「戦争ごっこ」に興じる子供たちを登場させて

――」。

[12] 国立劇場蔵の台本に「昭和十一年の晩秋」とある。ただし、「昭和十一年」の上に赤で削除線が引かれている。

[13] 松竹大谷図書館蔵の台本では、冒頭に「とき。昭和十二三年頃の、はる、なつ、あきふかく」とあるが、第一幕に「昭和十三年の四月中旬」とあるので十三年と判断した。

[14] 中巻の末尾にはシュトルツ一家からの「一九三九年五月二日」（中・三十五）の日付入りの手紙が掲げられている。下巻の開始時点はこの翌月である。

[15] 郷田版のみ雪子の結婚まで行き着かない。御牧（に当たる人物）も登場せず、雪子がその前の見合い相手である橋寺に断られ、妙子が板倉と死別して、各々再出発しようとするところで終わる。

いる。鶴子の息子二人が「日本軍」、相手をする妙子が「支那軍」という設定のようで、「突撃！（向かって行くが軽くあしらわれて）妙子叔母ちゃん、狡いわ。支那軍はそんなに強いことあらへんで」と、子供たちは木刀を持った妙子に文句を言う。ちなみにこの挿話はもとになっている菊田一夫版にはない。

この小さな挿話を皮切りに、堀越版では以下、「去年の暮以来支那との間も不穏な雲行きだす」（蒔岡の店の昔の店員）、「戦争が始まるかも知れん言うのに」（防護団員）というように、人物の台詞を通じて中国との戦争が近いことが示されていき、第一幕の最後で、「盧溝橋事件（日支事変）勃発を報せる号外の声」が聞こえる。雪子が「戦争やて……」と言うと、妙子は「船場の蒔岡は負け戦や」と笑う。これは鶴子の夫の辰雄が「陸軍を相手に軍需景気の波に乗ってる会社」との取引きによって蒔岡商店を立て直そうとして、その会社の倒産のあおりをくい、蒔岡家が決定的に没落することを指している[16]。「日本軍」役の子供たちが「支那軍」役の妙子に苦戦させられる「戦争ごっこ」からはじめて、日中戦争開戦と蒔岡家の没落を重ねる堀越版は、日本の戦争を「負け戦」として表象している。

小説にも、子供たちが「戦争ごっこ」をする挿話はある。ただし、小説では「戦争ごっこ」をするのは幸子の家の隣人であるドイツ人一家の子供たちと幸子の娘の悦子で、そこで想定されている敵はフランスである。「独逸の少年たちは、まだ小学校へも行かないフリッツのような幼童までが、敵のことを必ず「フランクライヒ、フランクライヒ」と云うので、初め幸子たちは何のことだか分らなかったが、それは独逸語で佛蘭西だということを貞之助に教えられて、今さらのように独逸人の家庭の躾け方を思いやった」（中・十一）。つまりこの「戦争ごっこ」の戦争は第一次世界大戦のことで、幸子の家の応接間の家具を使って「堡塁や特化点を作り、空気銃を擬してそれを攻撃する」とあるので、塹壕戦の様子を模しているようである。また、「少女たちばかりの時」のままごと遊びとは違って男の子たちが加わったときの遊びだとはされているが、ローゼマリーと悦子という女の子も参加している。敵役がいるわけではなく、シュトルツ一家の長男のペータアが上官で、残りの子供たちがその命令に従って一斉射撃をするという役割分担である。つまり悦子もドイツ兵の役をしていることになる。

「戦争ごっこ」を日本人の少年たちが中国を敵とするものへと置き換える堀越版では、戦争は日中戦争の意味になる。これに限らず、堀越版は日中戦争に関わる発言を男性の人物に担わせている。たとえば幸子の家で妙子の舞の会を開くとき、「明日の防火訓練」について話すためにあらわれた「防護団員」は「室内の様子に唖然として立ち竦」み、幸子らの鈍い反応に「戦争が始まるかも知れん言うのに、ここは別世界だすな」と呆れる。この挿話は小説にはなく、菊田版が創造し、堀越版はそれを引き継いでいる。ただし、菊田版では団員は「戦争よりこのほうがずっとえゝ」と舞に感心しているし、鈍い反応をするのは貞之助である。菊田版は貞之助を厭戦的な考えを持つ人物として造形しており、鈍い反応は個人の性質

---

[16] 開戦するのに軍需会社が倒産するのは不自然である。なお、小説では、「幸子は、夫が昨今或る軍需会社に関係し出してから彼女も懐工合がよく、家計の方も大分ゆとりができるようになっていた」（下・二十六）と、貞之助が軍需会社に関係して儲けているという文脈で、軍需会社への言及が見られる。

による。堀越版はこれを戦争を意識する男性と無関心な女性という、男女を対比する構図に整理している[17]。

小説にも、「男たちの多くは欧州戦争のことを話題に上せた。女たちは例によって「雪子娘さん」とこいさんの若さを褒めた」（下・十）というように、男女を対比して戦争を男性に割り振る表現は見られる。これは「国民精神総動員などが叫ばれ」（下・八）、「欧州戦争が勃発して（略）日華事変が三年越し片付かないところへ持って来て、悪くすると世界的動乱の渦の中へ巻き込まれるであろう」時だからという辰雄の意向で質素に執り行われた法事の場面でのことで、「男たち」は戦争を話題にし、「女たち」は結婚につながる話題を口にしている。ただし、このとき「国防服の上衣を脱い」（下・十）だある男性は、「僕、今月中に北支へ行きまんねん。実は妹が天津のダンスホールに出てましたら、軍部に見込まれてスパイになりましてん」と、羽振りのいい妹の誘いで「内地」を出るつもりだと吹聴するが、男性が戦争の話題を口にしているようで、中国で軍部と関係しているのは女性である。また、「男たち」が話題にする戦争は「欧州戦争」であり、辰雄も長引く日中戦争より「世界的動乱」を気にしている。

提灯行列

欧州戦争は、小説では幾度となく言及されるが、映画・演劇では外国人の人物たちがほとんど登場しないこともあって話題にされない。一九三九年九月に開戦する第二次世界大戦は、そもそもほとんどの映画・演劇の作中年代の範囲外である。つまり映画・演劇では、戦争というと、日中戦争を指すことになる。

日中戦争は、複数の脚色で南京陥落の提灯行列によって表現されている。堀越版では、雪子の見合い話を持ってきた東京の夫人が、「七月に支那との戦争が始まって、暮れには南京陥落。あの夜の東京は提灯行列で大変だったのよ」と、日中戦争の開戦と南京陥落の際の東京の提灯行列の祝祭ムードを話題にする。菊田版でも、東京の様子を問われた雪子が、「去年の暮の南京陥落の提灯行列は凄かったわ、流石は東京やと思うたけど」と返答している。

提灯行列は市川崑版でも確認できる。作中に流れる時間を一年間に圧縮する市川版は、花見からはじめて、紅葉の頃の見合いを経て、最後は雪子と妙子が結婚し、鶴子一家が東京に

---

[17] 「悲劇喜劇」掲載の台本ではカットされているが、堀越版には、妙子の人形の個展を訪れた夫婦連れの客が以下のようなやりとりをするヴァージョンもある（引用は一九九五・六、大阪新歌舞伎座の上演台本（個人蔵）より）。妻のほうは人形を見て「時代がどうなろうと、女が可愛らしいもん、綺麗な物にひかれる気持は変らしまへん」と言うが、夫は「……日本軍も奇襲作戦で広東を占領したまではよかったが、漢口、武昌地区を攻めるには大分難行しているらしいし……」と日中戦争の戦況を話題にする。妻は「ああ、もうそんな殺伐とした話はたくさん！」とそれを遮る。女性は可愛いもの、綺麗なものに惹かれ、男性は戦争の話題を好む。女性客はそれを「女」は時代を問わずそうなのだと一般化して話している。ここでも男女が対比され、男性が戦争の側に、女性が美しいものの側に配分されている。堀越版は戦争を男性のものとすることで、女性を免責していると考えられる。

移住する冬を、散る桜と見紛うような雪景色として見せている。その季節のめぐりの中で、場面と場面の間に脈略なく、たくさんの紅白の提灯が揺れ動く映像が挿しはさまれる。「万歳」と繰り返す歓声がかぶさるが、このショットに登場人物は不在で、そもそも背景の暗闇に沈んで人の姿は映らない。提灯行列がいつどこのもので、誰が見たものなのかは特定されない。しかしこの映像に続く豪華な着物が掛かった鶴子の家の場面で、女中のお久の「実家に、弟の戦死の公報がはい」ることから、日中戦争という時代背景を導入する意図は明らかである。

提灯行列から、亡き父が雪子のために準備したという、この時勢ではもう用意できない豪華な婚礼衣裳へという転換は、二つのイメージを対照する効果を狙ったものだろう[18]。雪子の見合いの食事の場面で、徐州占領後、「武漢三鎮の陥落」を目指す「我が皇軍の進撃」が話題にのぼり、壮行会らしい「隣室の軍歌の合唱」が流れてくるという演出も、結婚のすぐ傍らに戦争があることを暗示していると考えられる。妙子が結婚することになるバーテンダーの三好の店の外には、「暗闇に吹いている晩秋の夜風に、号外が一枚、舞っている。／その見出しの活字――『皇軍、広東を占領』」。

市川版は、「戦争に傾斜してゆく日本の空気を、四姉妹ではなく、お久という女中の弟が戦死したことなどを通して、絡め手から描く」[19]。同様に、菊田版では貞之助が満州に出征した息子を持つ庭師を気遣っている[20]。堀越版の幕切れでは、「表の通りから万歳の声」が聞こえて、鶴子が「出征する兵隊さんの見送りですやろ。この節はこの辺でも毎日……」と言うと、妙子が「召集令状、いつか三好にも来るんやろか。雪姉ちゃん、御牧さんに召集が来たらどないする……」と問いかけ、雪子が「ふん。あの人、軍服は似合わへんやろな」と返す。ここでは姉妹の結婚相手である男性たちの出征の可能性が口にされている。補足すると、妙子の恋人であった奥畑には、「満州国の役人が日本へ来て、満州国皇帝のお附になる日本人を二三十人募集している」（下・二十六）とのことで満州行きの話が持ち上がるが、小説では結局実現しない満州行きが、複数の脚色では皇帝のことは抜いた形で既定事実化している。

置き換えられる戦争

---

[18] 市川崑とともに脚色を担当した日高真也は、「画面には非常と思える時の気配もさり気なく散りばめてある。／ドラマに一見、係わりなく、解説もなく、突如、提灯の群れが描出されるのも、その一つ（戦勝提灯行列）。が、その直後、スクリーンは息をのむような色彩と図柄が氾濫してまさに着物ショーが展開する変転のアヤ。」と感嘆しており（「市川演出の映像の「アヤ」」、パンフレットより）、演出の段階で加えられたようである。

[19] 市川崑へのインタビューにおける森遊机の質問より（市川崑・森遊机『市川崑の映画たち』九四・一〇、ワイズ出版）。

[20] 満州に出征した息子を持つ庭師を、貞之助は「中支や南支とか、前線に出ている人達よりも、危険性が少ないだけでもいい」と慰める。庭師が日清・日露戦争のように長引かず短期間で終わって「頂くものだけ頂くような戦争」がいいと言うと、貞之助は「（冗談に）小父さんは、なかなか侵略主義者やなあ」と笑う。

翻って、小説では、日中戦争の戦況に関する情報はほとんど書き込まれていない[21]。日中戦争の開戦は、上巻で本家が東京に移住する頃の出来事だが、細江光が指摘するように、「開戦は言わば跨ぎ越され、その後の南京占領も武漢三鎮占領も、『細雪』には出て来ない」[22]。開戦への言及は、たとえば中巻で開かれる妙子の舞の会に関連して、「去年の七月以来時局に遠慮してしばらく中止していた」（中・二）というように、事後的に、また間接的になされる。「去年の七月」は昭和十二年（一九三七）七月七日の盧溝橋事件を指すが、下巻の最終章では、「雪子の色直しの衣裳なども、七・七禁令に引っかかって新たに染めることができ」（下・三十七）なかったとある。七・七禁令は盧溝橋事件の日付にもとづき、昭和十五年（一九四〇）七月七日に施行された贅沢品の製造や加工を禁じる省令である。妙子も舞の会に際し、豪華な衣裳を作るのは「差控えるべき時局下であるから」（中・三）という理由で、鶴子の婚礼衣裳を再利用していた。日中戦争の開戦は、姉妹たちの婚礼衣裳に関連して言及される。壮行会の話題も、橋寺との見合い話が持ち込まれる経緯の説明で、「この間或る人の出征を祝う歓送会の席上で紹介された」（下・十三）とか、橋寺による破談の経緯の説明で、「出征軍人を送る街頭行進か何かがあって、二人だけが長い行列に遮られてほかの人たちと離れてしまった」（下・十八）というように間接的に触れられることはあるが、いずれも特定の誰かの出征ではない。幸子ら姉妹には「戦死者はもとより、出征する親類縁者さえも居ないのである」[23]。

映画・演劇は、小説にはない日中戦争の要素を、小説にある要素を利用しながら加えている。市川版において雪子の見合いの食事の場面で日中戦争の進展が話題になるのも、仲人が「昨今の新聞を賑わしている独墺合邦の話を持ち出したのをきっかけに、シュニック墺首相の辞職、ヒットラー総統の維納入り等がしばらく話題に上った」（上・二十八）見合いの場面をもとにしていると推測される。ここでも堀越版における少年たちの「戦争ごっこ」と同様、欧州戦争が日中戦争に置き換えられている。

逆に言うと、小説では、戦争として話題にされ表象されるのは欧州戦争であって、日中戦争は、贅沢を自粛するべき「時勢」「時局」として人物たちの生活の背景をなしてはいても、戦争としては語られていない。それは日中戦争が「事変」であって戦争と規定されていなかった事実にもよるだろう。そして小説の中でこれを「事実上の戦争」（中・十三）と捉える

---

[21] たとえば漢口という地名が出て来ても、それは幸子が「近頃世界の視聴を集めている亜細亜と欧羅巴の二つの事件、――日本軍の漢口侵攻作戦とチェッコのズデーテン問題、――の成行きがどうなるであろうかと、朝な朝なの新聞を待ちかねるくらいにして読む」（中・十七）が今は頭に入らないというように、欧州大戦の話題と並列され、かつ人物の関心がそこにはないという文脈においてである。

[22] 細江光「谷崎潤一郎と戦争――芸術的抵抗の神話――」（「甲南女子大学研究紀要」九六・三）。

[23] 細江「谷崎潤一郎と戦争」（前掲）。姉妹が軍人と接するのも、沢崎との見合いの帰途の電車の中で、若い「陸軍士官が、シューベルトのセレナーデ」（下・六）、次いで「野薔薇」を唄い出し、「独逸映画「未完成交響楽」の中にあって、幸子たちにも馴染の深いものであった」ために和して唄うといううるわしい挿話においてである。

のは、幸子の家の隣家のドイツ人一家である。小説が戦争をどのように語るのか、ほとんどの映画・演劇には登場しないシュトルツ一家の、特に帰国後の動向を通じてたどろう。

4　予感される戦争

ドイツ人一家と欧州戦争

日中戦争開戦後のシュトルツ一家の動向は、以下の通りである。シュトルツ氏は、「支那事変が始まってからは商売の方が暇になった」（中・四）。夫人によれば、夫の仕事は「日本が事実上の戦争を始めてからさっぱり」（中・十三）で、「せっかく東洋を根拠にして地盤を築き上げた」ものの、帰国することを決める。子供たちが遊びで演じる別れのシーンでは、「突然「ドイッチュランド、ユーベル、アルレス」の合唱が、ローゼマリーとフリッツの声で聞え始めた」（中・二十一）。フランスを敵として想定する「戦争ごっこ」の挿話もそうだが、ここでも子供たちが国歌を歌うことで、一家がドイツという国をあらわすもののようになっている。離日後も、主に夫人と幸子の間で、手紙や贈り物を介した交流は続く。「一九三八年九月三十日」（中・二十二）の日付入りの経由地のマニラからの手紙で、夫人は「いかなる国民も戦争は好みませんから、結局戦争にはならないでしょう。チェッコ問題はヒットラーが処理してくれることと、私は確信しております」と書いて寄越していた。中巻の末尾には、「一九三九年五月二日」（中・三十五）の日付入りの夫人とローゼマリーのハンブルクからの手紙が掲げられている。

下巻の終盤では、「そんな間に、欧州の戦争は驚天動地の発展を遂げ」（下・二十五）たとして、シュトルツ一家と妙子の弟子でイギリスに渡った白系ロシア人のカタリナの安否を気遣うという文脈で、独軍の進撃によるフランスの降伏と休戦、ロンドンの空襲の話題が、ヒットラーの名前とともに語られる。ここでは、先の一九三八年九月の夫人の手紙が次のように振り返られている。

> ヒットラーなら万事を巧く処理するから多分戦争にはならないであろうと云っていたあの夫人の豫言は悉く外れて、このような大動乱の世の中が出現したのを、夫人は今頃いかに感じているであろう。あの長男のペータアも、もうヒットラーユーゲントに加わっている年頃ではなかろうか。事によると父親のシュトルツ氏なども召集を受けているのではあるまいか。でもあの人たちは、夫人やローゼマリーまでが、祖国の輝かしい戦果に酔うて一時の家庭の寂寥などは意に介していないでもあろうか。――などと、幸子たちは始終そんな噂をした。（下・二十五）

このとき小説の作中世界は、昭和十五年（一九四〇）六月である。戦争は回避されるだろうという夫人の見通しが外れたことを、この時点の幸子たちは知っている。また、ここでは父親と長男という男性たちの戦争への関与だけでなく、夫人と娘が「戦果に酔う」であろうこと、つまり女性たちの戦争への陶酔も想像されている。幸子の側も、「独逸の花々しい戦績は親交国民のわれわれとしても同慶のいたりに堪えない」と、ドイツの戦果への祝賀の言葉を記し、「日本も中国との紛争が収まらないので、だんだん本式の戦争に引き込まれる憂いがあること」などを書き送っている。

小説の中の最後の夫人からの手紙は、「一九四一年二月九日」（下・三十六）の日付のもの

で、最終章の一つ前の章に掲げられている。いまは女中も雇わず穴のあいた靴下を繕っているという夫人は、それも「輝かしい勝利」のためだと記している。「私どもは勝ち抜くために協力し、そのために僅かばかりの力を捧げ尽そうと倹約しているのでございます。日本でも万事が大そう質素になったと聞き及んでおります。（略）このことは向上に努める若々しい民族が負わねばならぬ共通の運命とでも申すべきでございましょうが、日向に一つの席を占めるということは、そうたやすくできることではございません。とは申せ、私どもはこの席を占めることができると、固く固く信じております」。夫人はドイツと日本の立場を重ねつつ、この戦争におけるドイツの勝利を予想、もしくは信じて祈念している。

『細雪』は、戦後の作品である。下巻の結末部は、戦後に執筆・発表され、読まれている。最後の夫人の手紙には、「もし戦争が輝かしい勝利に終り、そして何もかもまたもとの通りにちゃんとなりましたら」という文言も見える。この文言をドイツの敗戦を想わずに読むことは不可能である。手紙を書いた夫人やそれを読む幸子ら登場人物たちの認識とは別の次元で、小説の本文としてのこの文言には、ドイツの敗戦という欧州戦争の帰結が織り込まれているはずである。

作中年代が執筆・発表より前の作品では、これに類したことはしばしば起こり得る。だが『細雪』の下巻の結末部では、ヒットラーがうまく処理して戦争にはならないだろうという「夫人の豫言は悉く外れ」ことを、幸子たちが既に知っている。とするなら、作中年代と発表時期の間の時差のためだけでなく、ドイツの勝利を信じる夫人の予言が外れるであろうという理路によって、登場人物もドイツの敗戦を予感すると言えるのではないか。これは幸子らがそのように認識しているという意味ではない。ただ、ドイツの「輝かしい勝利」を信じる夫人の言葉を、その予言が当たらないと思って読者が読むのは、戦争の帰結を事実として知っているからだけではないだろう。

さらに言えば、一連の手紙のやりとりにおいて、ドイツと日本は並べられ、重ねられている。夫人の手紙にある「共通の運命」といった文言を踏まえると、ここで予感されているのは、欧州戦争におけるドイツの敗戦だけではなく日本のこと、いやむしろ日本の戦争、作中世界ではまだ起きてすらいない太平洋戦争における日本の敗戦なのではないか。

予感される太平洋戦争

そのことを補強すると思われるのが、空襲の話題である。シュトルツ一家やカタリナの近況を心配するという文脈で欧州戦争の展開が一気に語られる下巻二十五章で、日本にいる幸子は、貞之助と富士五湖めぐりの旅行に出かける。それ自体は平穏な夫婦のイベントなのだが、貞之助と落ち合うために寝台列車に乗った幸子は、「その日の昼に防空訓練があり、生れて始めてバケツのリレーに駆り出されたので、その疲れが残っていたせいか、とろとろしながらしきりに防空訓練の夢を見ては覚め見ては覚めした」（下・二十五）。夢の中では、自宅だが「実際のよりはずっとハイカラな亜米利加式の台所」で、タイルや白ペンキでピカピカ光っている中に並んでいる磁器やガラスの食器類が「防空サイレンが鳴ると、突然パチャン、パチャン、という音を立ててひとりでに破裂する」。「キラキラした細かい破片があたり一面に散乱する」中、雪子・悦子・女中のお春とともに逃げまどうこの夢は、「防空訓練の夢」と説明されているが、アメリカという要素も含め、明らかに太平洋戦争下の空襲のイメージである。さらに、目覚めると、寝台列車の窓から石炭殻が片眼に入ったらしく、幸子

は涙が止まらなくなっている。眼の負傷は夢の内容とは関係ないが、幸子の身体はあたかも空襲の被害を受けたかのようである。

小説の末尾で、御牧は建築の仕事をしばらく離れて、アメリカの大学で航空学を学んだ経歴を活かし、「今度尼崎市の郊外に工場が出来る東亜飛行機製作所」（下・三十七）に勤める予定になっている。御牧が飛行機製作所で働こうとしているのは、幸子の防空訓練とともに、来たる戦争では飛行機が中心になるであろうことを示している。そもそも井谷が御牧との見合い話を持ってきたのは、「今は世界的動乱の最中でもあり、亜米利加と日本との間にも事が起りそうな懸念があ」（下・二十七）り、しかし「仮りに事が起るとしても、今すぐではなさそうであるから、その前に大急ぎで行って来る」と、神戸の美容院を畳んで渡米することを決めたからであった。アメリカとの戦争がはじまることを予想しつつ、その前に急いで渡米して半年か一年で帰国し、その後は東京で美容院をひらくというのが井谷の計画であった。御牧を幸子らに引き合わせた井谷は慌ただしく渡米し、建築事務所を閉めた御牧は飛行機製作所に勤めて「時局下を切り抜け」（下・三十七）ようと決める。この小説の結末から一年と経たずに、昭和十六年（一九四一）十二月、太平洋戦争は開戦する。

このように下巻の結末部には、太平洋戦争の気配が色濃く漂っている。そして人物たちが予想し備えるその戦争は、現在において別の形で現前化してもいる。幸子は防空訓練のあとに空襲の光景のような夢を見ていた。また、いま空襲を経験しているのはロンドンにいるカタリナであるが、そのカタリナの近況は人づてに、「独逸の飛行機が飛んで来る通路に当っているので、毎日毎晩爆撃機の編隊が通り、盛んに爆弾を落すけれども、非常に深い完備した防空壕があるので、そこに電燈をカンカンつけて、ダンスレコードをジャンジャン鳴らして、コクテルを飲んではダンスしている、戦争なんてとても愉快で、恐いことなんかちっともない」（下・三十四）と伝えられる。「完備した防空壕」があって「電燈をカンカンつけて」やり過ごすことができるというカタリナがいま経験している空襲は、幸子らのいる日本にやがて訪れるであろうアメリカの飛行機による空襲がこのようではないことを想わせる。それはカタリナとは違って、不十分な防空壕で、燈火管制が敷かれる中で、バケツリレーで対処するような空襲であり、愉快ではない、恐い戦争であるはずだ。

御牧は「建築屋」と呼ばれ、貞之助が御牧の設計した家を見に行くなど、建築家としての仕事ぶりが叙述されていた。だが御牧の建築の仕事は「事変の影響下」（下・二十七）で減り、結末では、井谷の最初の説明にあった、「亜米利加へ渡り、どこだがあまり有名でない、州立の大学へはいって航空学を修め、ともかくもそこを卒業したのであることは確か」だという、そのあやふやな経歴が再浮上していた。では、御牧が建築家であったことにはどのような意味があるのだろうか。別稿では、御牧がどのような建築家なのか、作中年代の中に戻して検討する。

［付記］

・小説の本文は、谷崎潤一郎『細雪（全）』（八三・一、中公文庫）に拠った。ルビは適宜省略した。改行は／で示した。

・映画は、阿部豊版は「シナリオ細雪」（「映画芸術」五〇・三）、島耕二版は個人蔵、市川崑版は松竹大谷図書館蔵のシナリオを参照し、それぞれ映像と照合した。演劇は、郷田悳版は松竹大谷図書館蔵、菊田一夫版・川口松太郎版は国立劇場蔵の台本を参照した。上演回数

の多い堀越真版は台本も複数残っているが、公刊されている「戯曲『細雪』」（「悲劇喜劇」二〇一一・一〇）に拠った。